

## コラム・GO! GO! エレクトリシャン No.37

※(旧 DENKOU-SAN いらっしゃい!)

# 日本の経済的発展や景気を反映してきたネオンサイン LED チューブの登場でネオンサインの歴史は再び輝く

前回の本欄では、イルミネーションとともに、文明開化がはじまった明治時代から、日本人の胸を熱くしてきた「ネオンサイン」について触れた。

いわゆるネオン管(ネオンガスによる放電管)を使ったネオンサインは、戦前・戦後の日本の経済的発展および停滞を如実に示す、一種のアイコンであったともいえる。

たとえば高度経済成長時代に、全国の盛り場の夜空を彩ったネオンサインの輝度の高さを、経済的発展の指数を示すシンボルの一つとすれば、その後に訪れたオイルショックの際に、盛り場のネオンサインは「控え目」にされて電力節減のシンボルともなった。

このように大正・昭和のネオンサインの輝きは、日本の国力(経済力)や景気のそのときどきの情勢を反映する指標ともなったのだ。

なかでも家電品や自動車などの成長産業の夜の広告として、またネオン街という象徴的な名称に彩られた「夜専門の飲食店街」の宣材として機能したネオンに交じり、ひととき強烈な「異彩」をはなっていたのがパチンコ店のネオンサインだった。

20世紀後半の外国の映画作品のなかに登場する「日本的な都市風景」の一つとしても、しばしば取り上げられたパチンコ店のネオンサインは、現代に生きる我々日本人からみても、異様な迫力が備わっている。

写真は10年ほど前の東京・某所で撮影したパチンコ店のネオンサインだ。こんなネオンサインが、高度経済成長時代の盛り場には、競うようにして並んでい

た。このパチンコ店のネオンサインは、撮影当時すでに「前世紀の遺物」みたいな塩梅になっていて、ポツンと1店だけ、異様に輝いていたことを覚えている。

近年のパチンコ店は、周辺環境を考慮して、駅前風景の静かな地域ではそれなりの抑えたデザインにとどめたり、オシャレな店が建ち並ぶなかに立地する際には、なるべくオシャレっぽいデザインを心掛けたり、さまざまな工夫が凝らされている。

ネオンサインの設計や製作にはもちろん昔から、数多くのエレクトリシャン(電気技師・技能士)たちが介在してきたことだろう。現代においてもそれは同様のはずだが、前回の本欄でも触れたように、近年はネオン管のように自在に曲げることのできるLEDチューブが登場したことで、ネオンサインは今、イルミネーションといろいろな意味で融合し始めている。

ねぶた祭のねぶたのデザインの進化に、薄くしたり曲げたりすることが可能なLEDチューブの登場が拍車を掛けるなど、かつてのネオンサインの遺伝子をLEDに取り込んだようなカタチの新しいネオンサイン、すなわちネオ・ネオンサインとでもいうべき表現形式をもたらしたLEDチューブは、現代美術の素材としても盛んに取り入れられている。

前回も書いたように、少し冷めた色彩に特徴があったLEDが、ネオン管独特の温もりと華やかな色彩をも我が物にしたとき、一皮むけたLED新時代が訪れるような気がする。さらにかつてのネオン管もリバイバルされ、新しい生命を宿すのではないだろうか。